

放流効果について



1 ヒラメ

(経緯)・平成4年度より放流を開始、平成12年度より第4次計画に位置付けて大量放流を実施。

・現行の第8次計画では令和8年度に10万尾の放流を目標としている。

(効果)・漁獲量は5～6トン程度で推移していたが、R1年より増加し近年は10トンを超える漁獲がある。

・混入率は令和6年には7.6%

※混入率とは漁獲魚に占める放流魚の割合

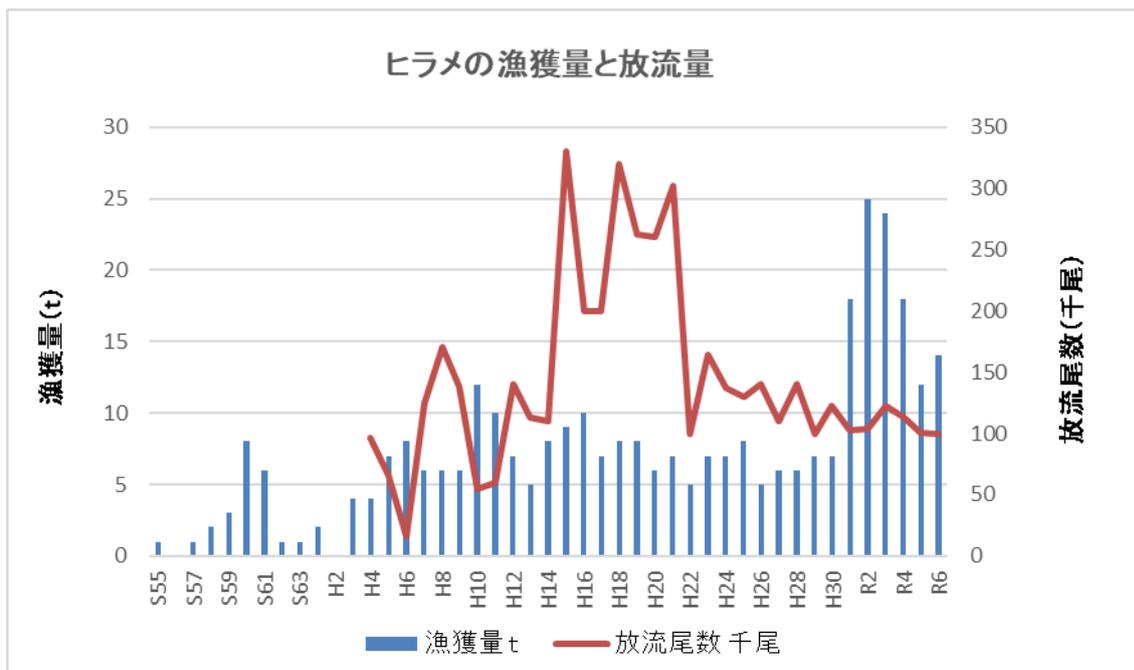


図1 ヒラメの漁獲量(統計値)と放流量の推移

2 キジハタ



(経緯)・平成12年度より第4次計画の技術開発魚種に位置づけ、種苗生産と放流の検証をスタート。

・平成22年度より第6次計画の放流魚種に位置づけ、年間10万尾程度の放流を、以降継続して実施。

・現行の第8次計画では令和8年度に11万尾の放流を目標としている。

(効果)・漁獲量は昭和63年には10トン程度漁獲されていたが、平成に入りほとんど漁獲がなくなった。

・放流の開始以降、漁獲量は徐々に増え始め、近年は2～4トン程度で推移。

・混入率は令和6年には88.8%

【R7 放流効果調査】

目的：適切な放流全長の把握

方法：令和元年～3年度の大型種苗（全長100mm）と小型種苗（全長80mm）に標識（腹鰭除去+耳石ALC標識）を装着し、比較放流を実施

結果：泉大津市地先と堺市地先における刺網の試験操業の結果、合計35尾のキジハタが漁獲され、うち12尾が放流魚（大型種苗3尾、小型種苗4尾）の採捕が確認された。

⇒大型種苗と小型種苗で大きな差はなかった。

※令和6年度に全長50mmと全長100mmで比較した際は100mmの方が放流効果は高かった。

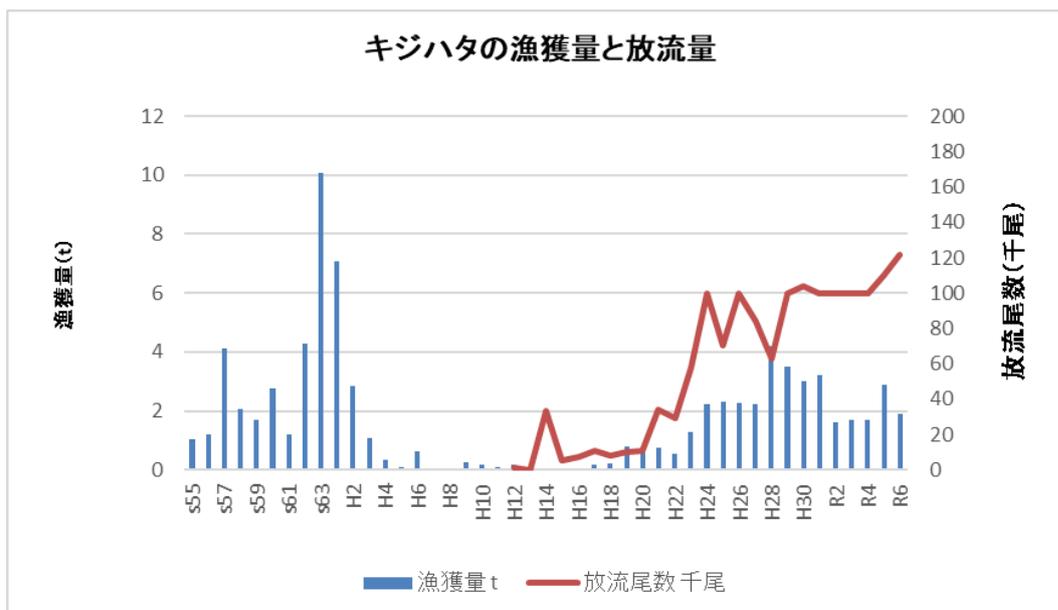


図2 キジハタの漁獲量（推定値）と放流量の推移

3 アカガイ



- (経緯) ・平成4～6年にかけて第2次および第3次計画に基づき、最大4万個放流。
以降中止。
- ・平成27年より、第7次計画の放流魚種に位置づけ放流を再開。5～10万個程度の放流を実施。
 - ・現行の第8次計画では令和8年度に5万個の放流を目標としている。
 - ・これまでは水産技術センターの調査船により放流を実施していたが、令和5年度からは漁業者自身により放流を実施した。関空島周辺の採捕禁止区域に放流することで、再生産への効果を期待。
- (効果) ・過去より漁獲量の変動は大きいものの、放流の開始以降は20～40トン程度で高い漁獲が続いている。
- ・令和7年の調査では標識個体は確認できなかった。なお、令和4年度以降は漁場での標識放流を行っていないため、過去に放流を行ったものが混入しているのみであるために低い混入率となっている

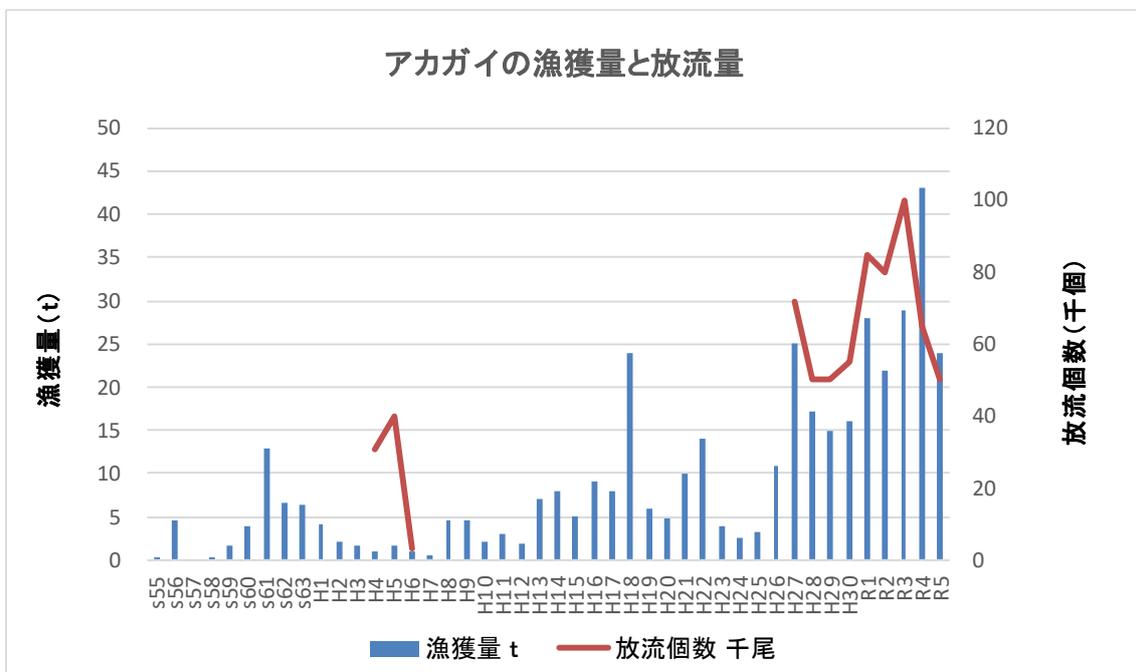


図3 アカガイの漁獲量（推定値）と放流量の推移

4 トラフグ



- (経緯)・平成27年度の第7次計画より、技術開発魚種に位置づけ、年間1～3万尾程度の放流を実施。中間育成技術や放流適地の検証等を行ってきた。
- ・現行の第8次計画からは、放流魚種にも併せて位置づけ。
令和8年度に年間5万尾の放流を目標としている。
- (効果)・大阪での漁獲量は年間200キロ程度と推定。これまでは技術開発段階であり、放流数が多くないことから、資源造成の効果は表れていない。
- ・再捕獲の状況としては、7月頃に放流した個体が、11月頃から25センチ程度の当歳魚として漁獲され始める。翌4月頃になると当歳魚の漁獲が減少し、大阪湾外へ移動すると考えられる。
 - ・令和4年度では月1～2回の標本漁協での市場調査を中心に13個体が再捕獲。
 - ・令和5年度には、泉佐野漁協の市場調査で、令和2年に堺浜から放流された個体（3歳魚：405mm、2kg程度）が1個体確認され、これまでで放流後最も時間経過して採集された事例となった。
 - ・令和6年度には3月に令和4年に放流した個体が採捕されているのを確認したものの、放流由来はこの1個体のみであった。
 - ・令和7年度にも、これまでと同様に標本漁協での市場調査を実施したが、1月末の時点では放流由来の個体が確認できず、年により混入状況には差が生じる可能性があると考えられた。
- (飼育試験)・本年度は試験的に異なる水深と密度で飼育したと、水深0.8mと1.5mでは1.5m、密度120尾/トンと200尾/トンでは120尾/トンの方で成長がよく、尾鰭の欠損も改善することが確かめられた。

5 メバル



(経緯)・令和4年度の第8次計画より、技術開発魚種に位置づけ、放流効果の検証を開始。

- ・スパゲティタグで標識した個体約1万尾を、毎年岬町の増殖場周辺に放流。
- ・現在の大阪府内での漁獲量は推定で5トン～10トン程度。

(効果)・放流後の移動、成長の把握のため、随時漁獲物調査を実施中。

- ・SNS等を活用してメバルの標識放流について周知を行った。令和7年度には、12月下旬までに釣り人から31件51尾の採捕報告が寄せられた。大多数は放流場所である岬町周辺で採捕されていた。なお、51尾のうち令和5年1月放流個体が1尾、令和6年1月放流個体が7尾、令和6年12月放流個体が40尾、令和7年6月放流個体が3尾であった。今後の成長に伴って刺網等で漁獲されることが期待されるため、釣りによる採捕状況とあわせて漁獲物のモニタリングも継続していく。



図4 標識を装着したメバル

標識がついた
メバル
探しています!

おさかの環境水産技術センター
【TEL】072-495-5252 / 【FAX】072-495-5600
E-mail: houryu@suishi.in.arena.ne.jp

お問い合わせ先
地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター 担当：木村・辻村
〒599-0311 大阪府泉南郡岬町多奈川谷川2926-1

ご報告いただきたい事項

- 採捕日
- 採捕場所
- 標識の色
- 大きさ
- 可能であれば、魚の写真

おさかの環境水産技術センターでは、2022年から標識をつけたメバルを放流し、移動や成長についての調査を行っています。背中に標識がついたメバルが獲れた場合は、当センターまでご連絡をお願いします。

このページのメールはこちら

図5 メバル再捕獲情報提供依頼ポスター